

## 第5章 弥生時代～古墳時代中期の調査

### 第1節 概要 (図19)

本調査地の主体となる時期である。A・B区においてはV層がその遺物包含層であり、この下面から墳墓、集石、竪穴住居、掘立柱建物、土坑やピットを検出した。墳墓は埋葬施設や共伴する遺物がないため、時期・性格とも明確にはし得ないが、谷の低い部分に築かれる点は特異であろう。また、住居は竪穴住居1を除き、いずれも複数回の建て替えが行なわれる。これらは湧水の激しいところに建てられ、住居山側に溝を掘るなどの対策を講じている。

C・D区においては谷部で厚い堆積をしていたX層が遺物包含層である。しかし、この下面では土坑、溝、およびピット群を検出したのみであった。A・B区同様、ピットの配列に規則性は見出せず、建物の復元はできなかった。また全体を通じ、遺構外からの遺物出土量は少ない。(中森)

### 第2節 検出した遺構と遺物

#### 門前1号墓 (図20・21、カラー図版4・5-1、図版8・9)

本遺構は、調査区東端E3グリッドを中心とする、A・B区谷の底部に位置する。古墳時代前期遺物包含層のV層下面で検出した。盛土・列石・溝・土坑等から構成される。

**盛土**は、北側を中心に広がっており、黄褐から褐色を呈する(㉔～㉖層)。東西方向は約10.1m、南北方向は最大で4.2m、厚さは最大で0.3mを測る。一部で基盤層(VI層以下)を切っているが(F-F'・G-G')、概ね基盤層の標高が低い北側に厚い。ブロック土や、砂礫を多く含み、範囲の東辺の一部と北辺は直線的なことから、人為的に移動された土であり、後述する列石が裾部に並ぶことから、盛土と想定できる。

**列石**は、盛土東辺とその延長線上で1条、北辺で2条を検出した。東辺を列石1、北辺の北側を列石2、南側を列石3と呼称する。列石1と2はL字状に、列石2の南に並行して列石3が配されている。列石1北半と列石2は、黄褐色系の土を除去して検出した。この土は盛土と類似しており、盛土からの崩落土と考えている。列石1と2の間は、約0.3mの間隔がある。ここは盛土の北東隅にあたるが、比較的遺存状態の良い部分であり、構築当初から石列がなかった可能性が高い。いずれも、最下段に径約15～25cmの大きめの石を並べた後、主体となる径約5～15cmの円礫を密に積み上げている。列石1は基盤層(VI層)を、列石2・3は盛土と、一部基盤層を削り出して作られた約45°の斜面に沿って積まれている。このことから、列石1・2は、墳丘を強調あるいは保護するための外装施設たる、貼石と考えられる。

**列石1**は、南北方向に直線的に伸びており、全長約5.2m、幅約0.2～0.3m、高さは最大で0.3mを測る。下端の標高は、南側が高く北側が低い。比高差は、約0.7mである。

**列石2**は、列石1北端付近から西に向かって直線的に延びており、全長約5.3m、幅約0.2～0.3m、高さは最大で0.25mを測る。下端の標高は、西側が高く東側が低い。比高差は、約0.7mである。最下段の石は、細い溝状の凹み(㉗層)に入れられている。

**列石3**は、列石2から約0.6m南で、列石2とほぼ並行しており、やや北側に湾曲する平面形を呈する。一部が列石2に切られており、残存部は全長約4.5m、幅約0.2～0.4m、高さは最大で0.3

mを測る。最下段の標高は、西側が高く東側が低い。西端と東端の比高差は約0.5 mである。この標高は列石2とほぼ同一である。盛土上層除去後に検出したことから、墳丘拡張前の貼石、構築の過程における土止めの可能性が挙げられよう。しかし、規模、形態、最下部に大きめの石を配する特徴などが、列石1・2と類似することから、前者の可能性が高い。

溝は、列石3の北側で検出した。列石3に沿って南北方向が長軸であり、約5 mを測る。西端はE-E'ライン付近で終息し、東側はG-G'付近で立ち上がり不明瞭となる。幅は約1 m～1.7 mを測り、東に行くにしたがい広がる。断面形態は浅い皿状を呈し、深さは約0.1～0.15 mを測る。遺物は、出土していない。

土坑は、本遺構を覆うV層の除去後、盛土を切って構築された土坑25・26・27を検出した。

土坑25は、墳丘北半に位置する。盛土と土坑26を切って構築されている。平面形は南北方向に長い不整楕円形、断面形態はU字状を呈する。長軸は約2.2 m、短軸は約1 m、深さは最大で0.35 mを測る。埋土は褐色から暗褐色を呈し、3層に分層した(⑨～⑩層)。東壁に接し、長軸0.3 m、短軸0.2 m、厚さ0.05 mの扁平な石が出土している。

土坑26は、墳丘北半に位置する。盛土を切って構築される。土坑25に大半を切られており、遺存状態は不良である。平面形は楕円形、断面形態はU字状を呈する。長軸は約1.5 m、短軸は0.9 m、深さは最大で0.45 mを測る。埋土は暗褐色を呈する(⑬層)。遺物は出土していない。

土坑27は、墳丘南半に位置する。盛土を切って構築される。平面形は不整楕円形、断面形態は浅い皿状を呈する。長軸は約2 m、短軸は0.9～1.1 m、深さは最大で0.2 mを測る。埋土は暗黄褐色を呈する(⑭層)。遺物は出土していない。

本遺構は、外装施設・盛土を有する。これらの特徴から、テラス状の構築物や、墳墓の可能性が想定できる。しかし、盛土上には、先述の土坑以外にピット等の構築物は認められない。また、軸がほぼ正位で谷筋とは約45°のずれがあり、等高線に沿って構築されることの多いテラスとは同列に扱づらい。さらに、列石3を拡張前の貼石とした場合、墳丘に沿う周溝の存在も想定できる。したがって、後者の可能性が高い。谷の底部という特異な立地環境にあり、流水や土砂の流れ込み、流失といった不安定な状況が想定される。これらは、墳墓の立地・構築環境としてはマイナスの要因であるが、上記の理由から、墳墓として報告する。

平面形は、長方形を呈すると推測される。東西方向は盛土範囲で約10 mを測り、南北方向は列石1から約5.2 m以上、高さは最大で0.55 m以上を測る。列石1はさらに南側に延びていた可能性はあるが、列石1南端から約1.5 m南に延長すると谷の南東斜面に当たり、この部分には削り出し等の造作は施されていない。このため、墳丘東辺は最大でも6.7 mとなり、墳丘の平面形態は東西に長軸を持つことが想定できる。列石が北辺と東辺のみで確認されたことから、谷の出口方向である北東側を意識して構築された可能性がある。頂部は南西から北東に向かって傾斜しており、盛土部分の最高部と、列石1下端の比高差は約1.05 mである。列石も最大で高さ約0.3 mを測るが、最下部の石のみ残存する部分も多く、上部は削平されている可能性がある。土坑25などは形態も不整形ではあるが、明確な掘り込みを持ち、位置と検出面から主体部の可能性もあろう。なお、北東部では、地滑りや、地震によると考えられる断層を確認している。本遺構もこの影響で、北東側が約0.15 m落ち込んでいた(図版9-1)。

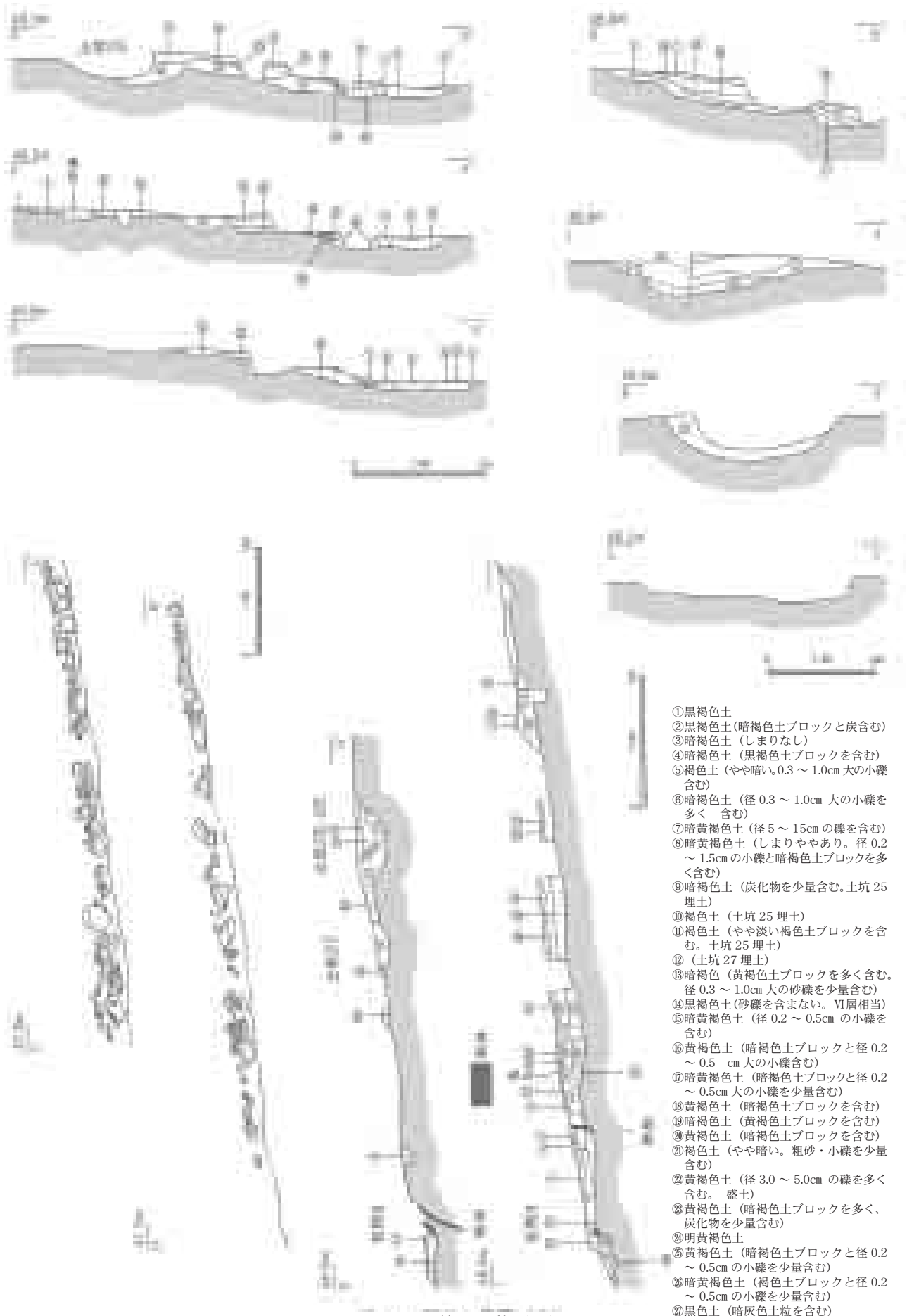
本遺構からは、良好な遺物が出土しておらず、明確な時期決定は行い得ない。ただし、弥生時代終



図 19 弥生時代終末～古墳時代中期遺構分布



図20 門前1号墓(1)



- ①黒褐色土
- ②黒褐色土(暗褐色土ブロックと炭含む)
- ③暗褐色土(しまりなし)
- ④暗褐色土(黒褐色土ブロックを含む)
- ⑤褐色土(やや暗い。0.3～1.0cm大の小礫含む)
- ⑥暗褐色土(径0.3～1.0cm大の小礫を多く含む)
- ⑦暗黄褐色土(径5～15cmの礫を含む)
- ⑧暗黄褐色土(しまりややあり。径0.2～1.5cmの小礫と暗褐色土ブロックを多く含む)
- ⑨暗褐色土(炭化物を少量含む。土坑25埋土)
- ⑩褐色土(土坑25埋土)
- ⑪褐色土(やや淡い褐色土ブロックを含む。土坑25埋土)
- ⑫(土坑27埋土)
- ⑬暗褐色土(黄褐色土ブロックを多く含む。径0.3～1.0cm大の砂礫を少量含む)
- ⑭黒褐色土(砂礫を含まない。VI層相当)
- ⑮暗黄褐色土(径0.2～0.5cmの小礫を含む)
- ⑯黄褐色土(暗褐色土ブロックと径0.2～0.5cm大の小礫含む)
- ⑰暗黄褐色土(暗褐色土ブロックと径0.2～0.5cm大の小礫を少量含む)
- ⑱黄褐色土(暗褐色土ブロックを含む)
- ⑲暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)
- ⑳黄褐色土(暗褐色土ブロックを含む)
- ㉑褐色土(やや暗い。粗砂・小礫を少量含む)
- ㉒黄褐色土(径3.0～5.0cmの礫を多く含む。盛土)
- ㉓黄褐色土(暗褐色土ブロックを多く、炭化物を少量含む)
- ㉔明黄褐色土
- ㉕黄褐色土(暗褐色土ブロックと径0.2～0.5cmの小礫を少量含む)
- ㉖暗黄褐色土(褐色土ブロックと径0.2～0.5cmの小礫を少量含む)
- ㉗黒色土(暗灰色土粒を含む)

図21 門前1号墓(2)

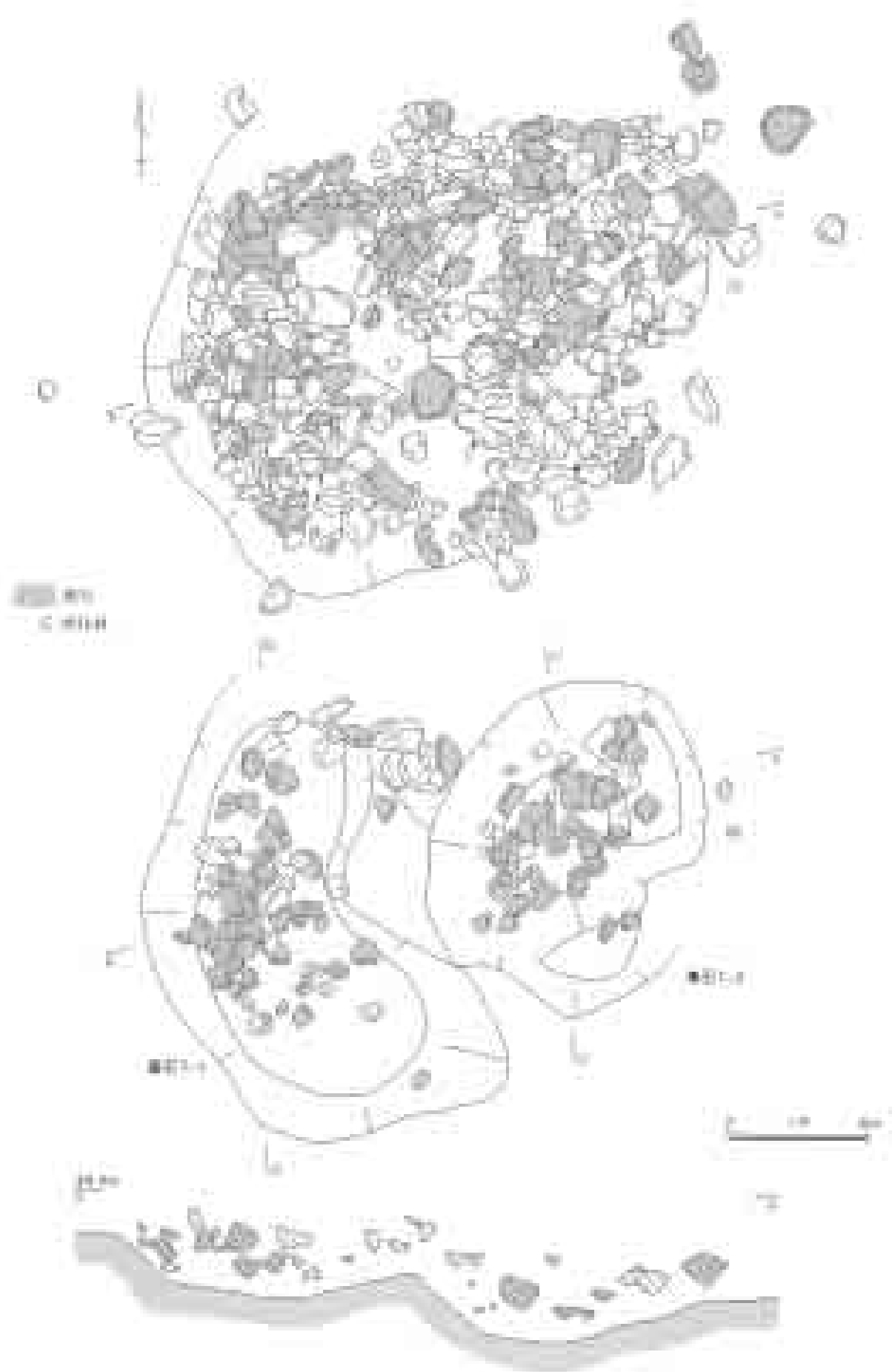


図 22 集石 1

末期後半から古墳時代前期の遺物包含層に覆われている。また付近には、弥生時代終末期後半から古墳時代後期にかけて集落が営まれる。これらと、墳墓との同時併存は考えにくい。したがって、構築時期の下限は、弥生時代終末期後半と捉えられる。(湯川)

集石 1 (図 22・23、カラー図版 5-2、図版 10)

E3 杭の南、門前 1 号墓の南上面に位置し、V 層下面で検出した。礫は長径 2.1 m、短径 1.6 m ほどを測る楕円形状の範囲に密集するが、検出面中央にやや空白部分がある。大きさは 10cm 前後の拳大が大半を占め、わずかに 20cm ほどの人頭大の礫がみられる。また、そのほとんどに焼けた痕跡が見

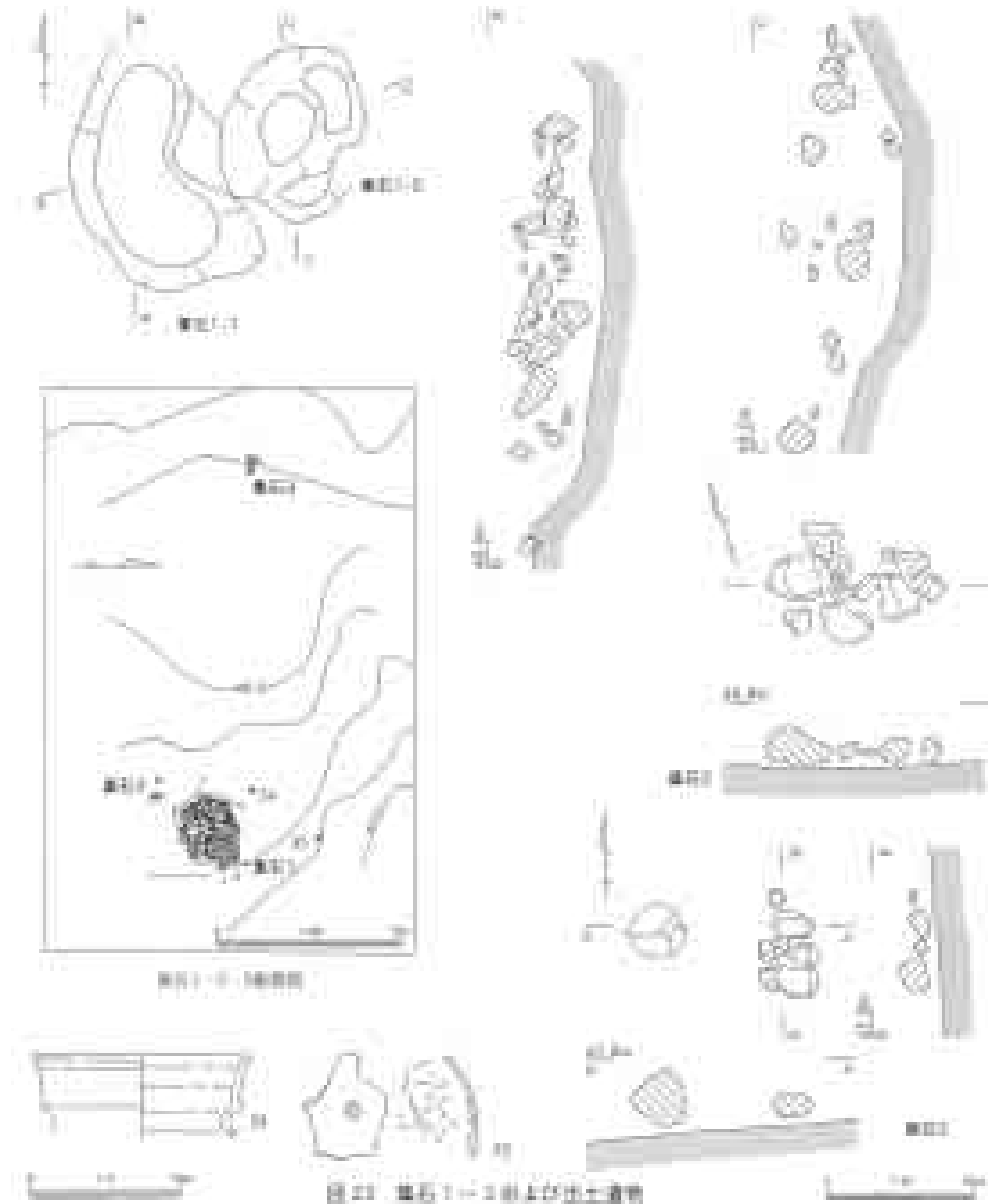


図 22 集石 1—3 群よび出土遺物

出された。礫の下には東西に並ぶ2基の浅い土坑を検出した。そこでこれらを集石1-1・2と呼称する。西側の集石1-1が高く、1-2は一段低い。土坑の間は集石1-1側に緩く傾斜するものの、若干の平坦面が形成され、その部分が礫の空白部と重なる。

集石1-1は北側が削平されているためその正確な規模は不明であるが、長径1.8m、短径0.8mほどの勾玉形を呈する。深さは0.25mで、底面近くにおいては土坑中央部に礫が集中する。集石1-2は長径1.2m、短径1.0mほどの楕円形を呈し、深さは約0.25mある。土坑北東・南東部はテラス状になり、一段下がる中央部に礫が密集する。両土坑の埋土はV層に相当する黒色土であった。なお1号墓上面の西北側には土坑25～27があるが、これらは埋土が1号墓盛土に類似するものであり、本遺構と異なる。また、V層堆積前段階で1号墓盛土が削平を受けている可能性が高いことから、集石1が1号墓と同時期性をもつものではないと考えられる。

土坑内の礫に混じって非常に微量の炭化物が出土したが、土坑壁面などに焼けた痕跡は見出せなかった。そのため礫は周辺で焼いたものをここに集めたと考えられる。ここから3mほど南西には焼土2～4(図38)がみられ、これらとの関連性が窺えよう。また礫内から突帯文土器(32)があり、さらに炭化物の年代測定を行なったが(第10章7)、本遺構がV層下面検出であること、周辺から弥生土器甕(34)が出土したことから、弥生時代終末～古墳時代前期のものと考えられる。(中森)

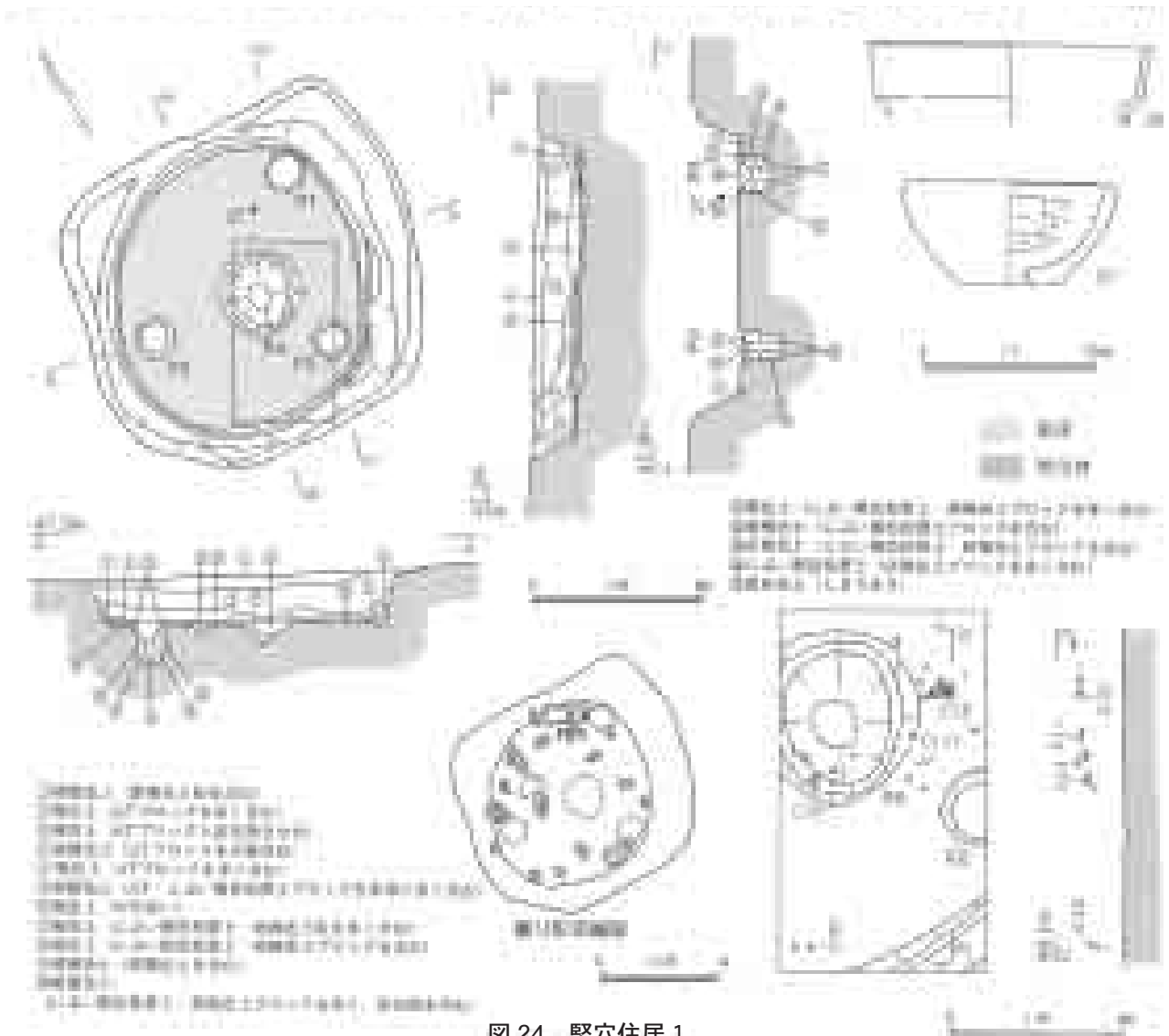


図24 竪穴住居1



**集石 2 (図 23)**

E 3 グリッド、集石 1 の 0.5 m ほど南に位置する。拳～人頭大の礫が南北を軸に長径 0.4 m、短径 0.2 m の楕円形状に配され、ここから約 0.3 m 西に離れて人頭大の礫が 1 点ある。集石 1 のように礫の焼けた痕跡や掘り形は確認できなかったが、位置関係から関連性の高いものと考えられる。(中森)

**集石 3 (図 23、図版 9-5)**

E 2 杭直下、集石 1 から 9 m ほど西に位置する。ほぼ東西を軸に、長径 0.6 m、短径 0.4 m ほどの範囲に拳～人頭大礫がまとまる。人頭大が外周にあり、その中に拳大のものが入る傾向が見受けられる。掘り形、礫の焼けた痕跡などは確認できていない。VI 層上面検出のため当期と判断した。(中森)

**竪穴住居 1 (図 24、図版 15)**

調査地北東、C 5 グリッド位置する。谷 1 北東の肩部にあたり、ここに堆積する V 層下面で検出した。平面形態は楕円形で、長軸約 3.5 m、短軸約 3 m を測る。壁は約 70° の角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは、最深で 0.65 m を測る。北西側と東側には、浅いテラス状の落ち込みがある。この落ち込みは、なだらかに立ち上がることから、人為的な掘削ではない可能性がある。床面には貼床(Ⅴ層)が施されており、床面の標高は約 47.6 m、床面積は約 7.0㎡ を測る。全周する周壁溝と、P 1～4 を検出した。P 1～3 は壁際に等間隔で配されており、その配置から支柱穴と判断した。径は平均で 0.45 m、深さは約 0.4～0.5 m を測る。いずれも、柱痕跡(Ⅸ層)を確認している。P 4 は、いわゆる中央ピットで、周囲に高さ 2～3 cm の周堤がめぐる。長軸約 0.7 m、短軸 0.6 m、深さ約 0.3 m を測る。貼床除去後、掘削痕跡の可能性のある不整形な落ち込みを多数確認した。

竪穴部の③層は、炭化物を多く含み、帯状に堆積することから、屋根土を由来とする堆積の可能性はある。出土遺物は少量で、36 は弥生時代終末期の甕で①層出土、37 は同時期の鉢で③層の出土である。出土遺物と、形態から弥生時代終末期の竪穴住居と判断した。(湯川)

**竪穴住居 2～4・溝 1 (図 25～27、図版 12～14)**

A 区南西側、C・D 区谷の肩部に位置する。南側は竪穴住居 5 溝 D に切られ、北西側は調査地外である。床面には 3 段階の貼床が施され、各段階において 1 条の周壁溝を検出した。よって、住居が 3 時期にわたって使用されたと考えられ、最古段階の住居を竪穴住居 2、2 段階目を竪穴住居 3、最終段階を竪穴住居 4 とする。また、竪穴住居 2 の貼床下には土坑 30 が存在する。

**竪穴住居 2** の平面形は隅丸方形を呈し、貼床 a を床面とする。床面での長軸約 4.9 m、短軸約 4.8 m を測る。周壁溝は住居北側のみで検出し、幅約 0.3 m、深さ 0.1 m を測る。支柱穴と考えられるのは P 1～4 であり、P 3 埋土中から長軸約 9 cm～12 cm の自然礫が 3 点出土し、P 1・4 埋土から長軸約 8～15 cm の自然礫が 10 点程度出土した。支柱を支えるために入れられたものであろうか。土器は出土していない。

**竪穴住居 3** の平面形は隅丸方形を呈し、貼床 b を床面とする。床面での長軸約 4.70 m、床面積は残存 23.3㎡ を測る。床面には幅約 0.3 cm、深さ約 0.05 m の周壁溝を検出した。支柱穴と考えられるのは P 8・2・3・9 であり、P 2・3 は竪穴住居 2 の柱穴を再使用したものと思われる。なお、P 9 は平面的には P 4 とほぼ同位置で検出した。別ピットとして扱ったが、本来的には同一ピットであった可能性も否定できない。住居中央の P 10 は平面楕円形を呈し、埋土は黒褐色土である。P 10 の東側床面に溝 A、西側床面に溝 B を検出した。溝 A は東側周壁溝中央部から、P 10 に延び、溝 B は P 10 から西側の調査地外に延びる。溝 A は幅 0.4 m、溝 B は幅 0.3 m を測り、溝 A の底面レベルは P 10

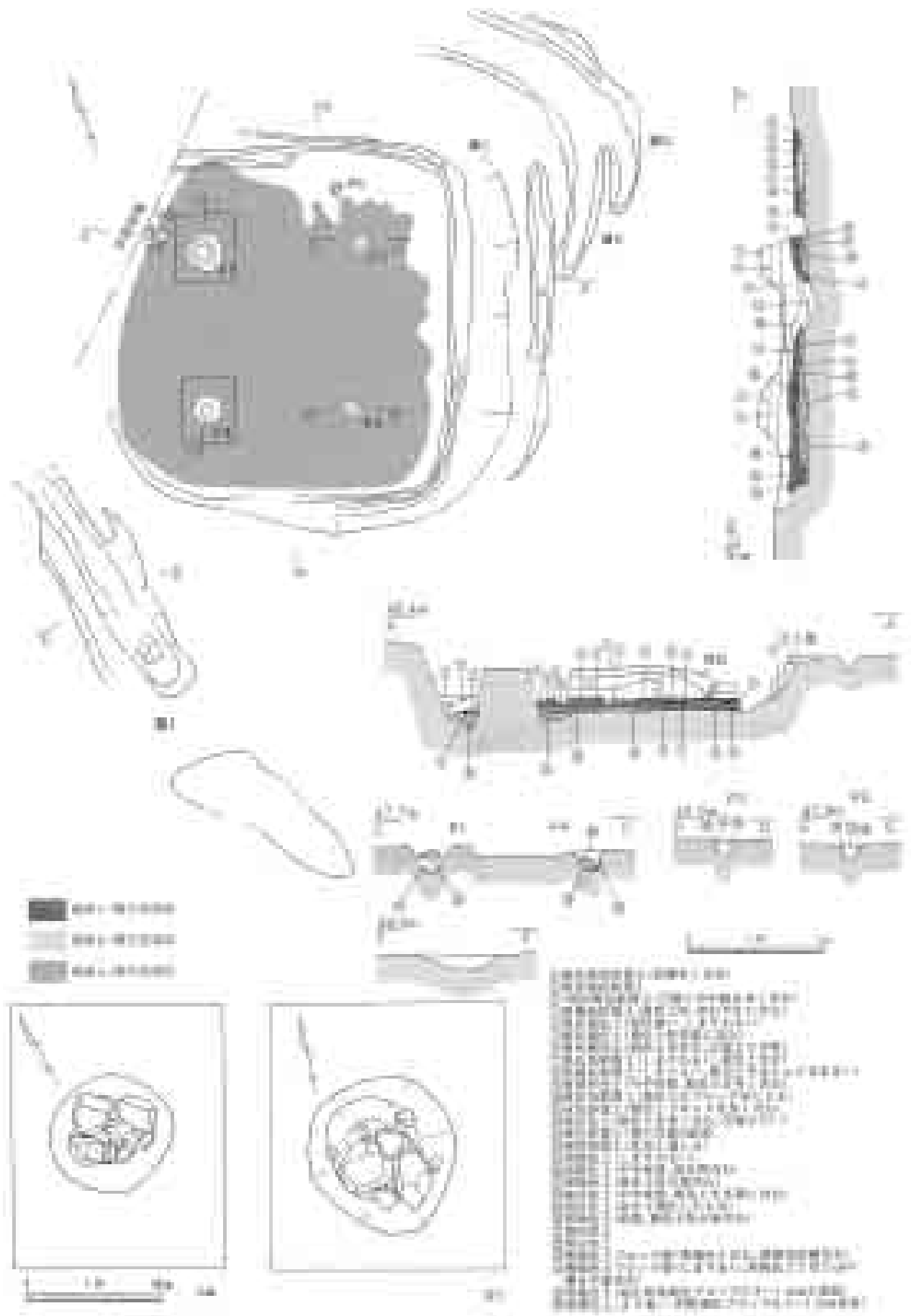


图25 竖穴住居2・3、溝

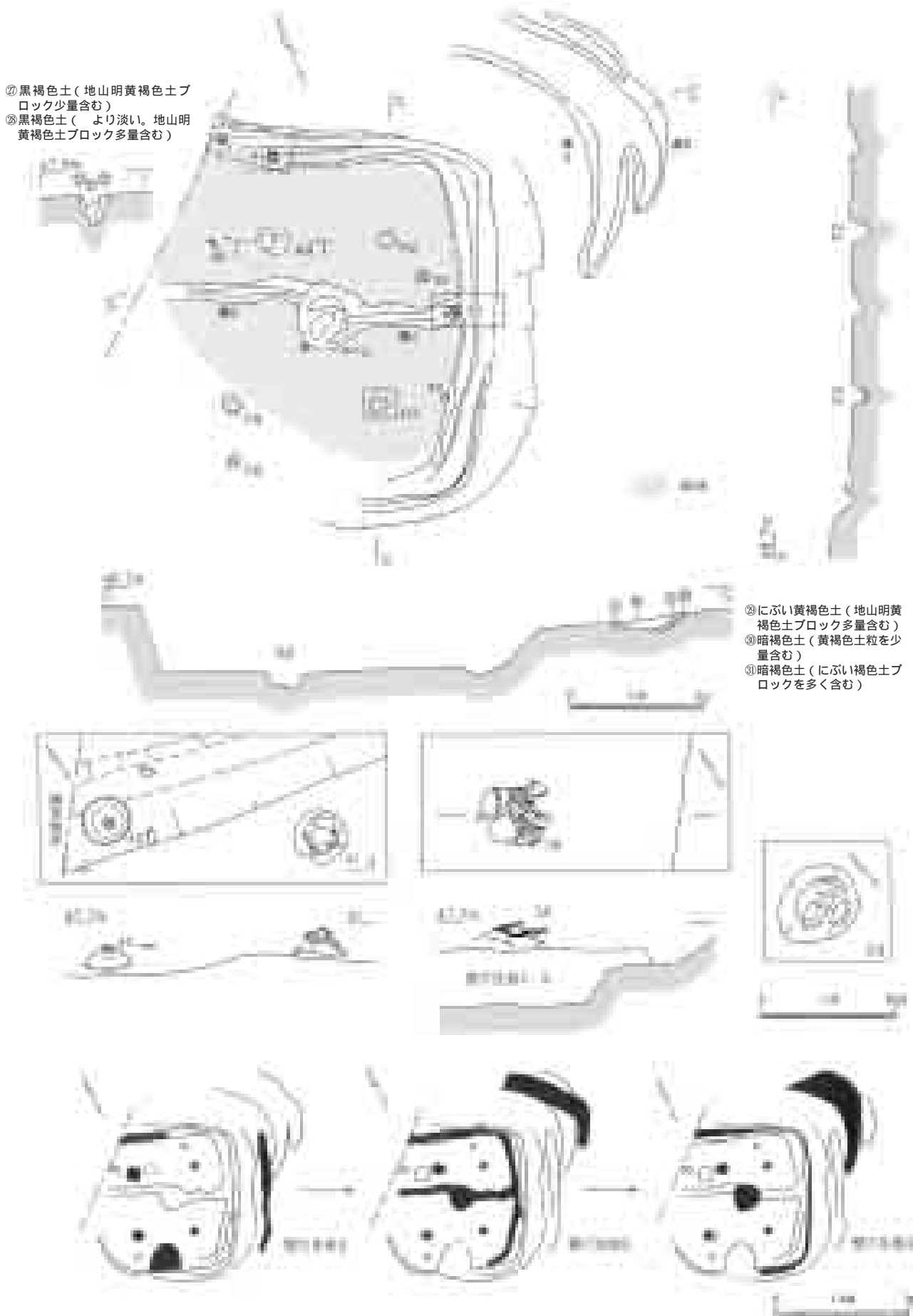


図 26 竪穴住居 4 および竪穴住居 2～4 変遷

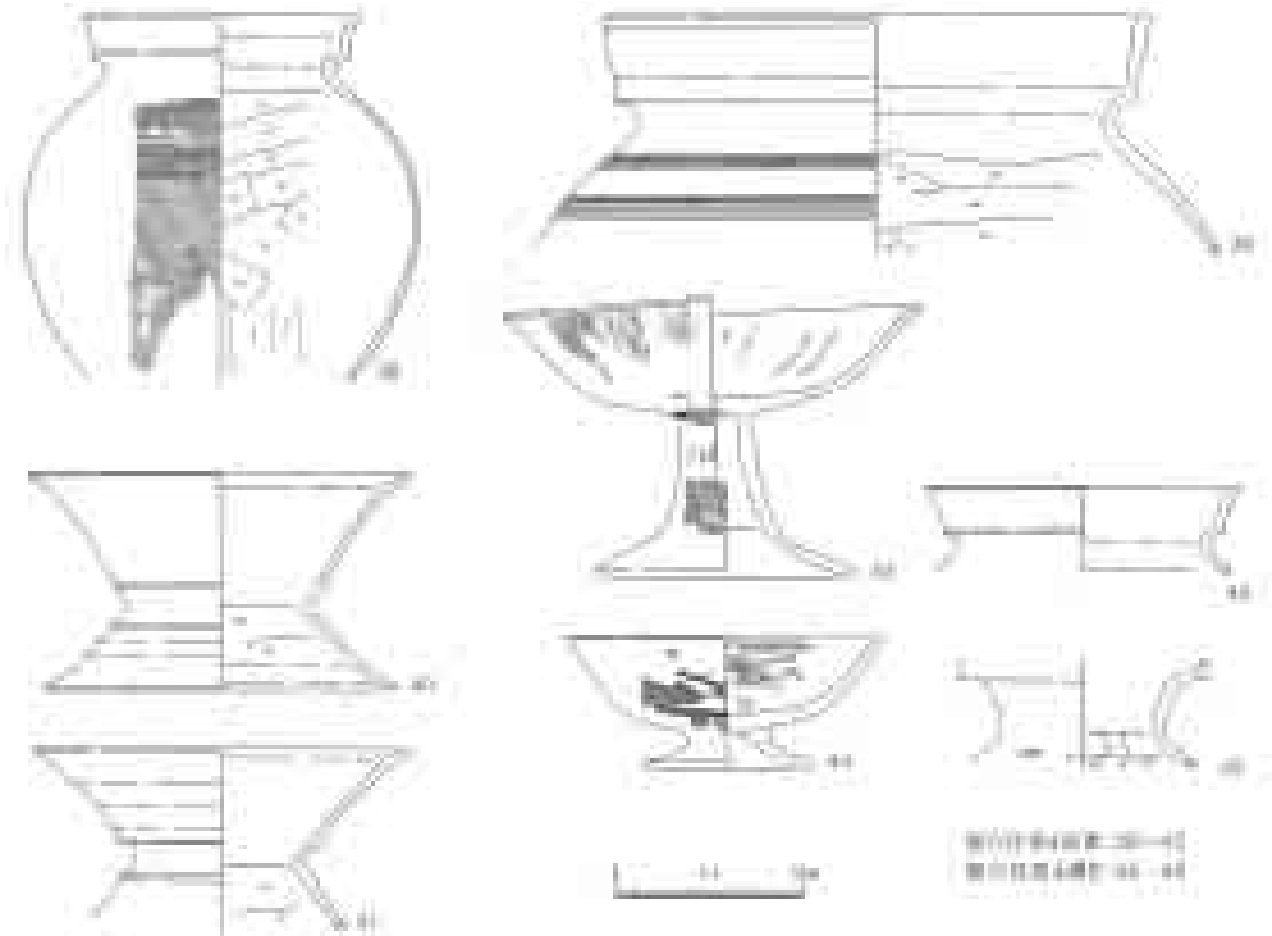


図 27 竪穴住居 4 出土遺物

側が低く、溝 B の底面レベルは北西側が低い。埋土はともに黒褐色土である。遺物は出土していない。

竪穴住居 4 の平面形は隅丸方形を呈し、貼床 c を床面とする。床面での長軸約 5.22m を測る。床面積は残存 27.1㎡ を測る。壁の高さは約 0.6m である。床面には幅約 0.2m、深さ約 0.1m の周壁溝を検出した。支柱穴と考えられるのは P 8・2・3・9 であり、P 10 とともに竪穴住居 3 を再使用したものと思われる。

住居の東側に、溝 C～E を検出した。埋土は 3 条とも暗褐色土を基調とする。溝 C は北東側の壁に並行し、溝 E に切られる。検出面での幅は約 0.4m、深さは約 0.1m を測る。溝 D・E は住居東側隅部の壁に並行し、平面形も類似する。溝 D は溝 E に切れ、溝 D の検出面での幅は約 0.4m、深さは約 0.3m を測り、溝 E の検出面での幅は約 0.6m、深さは約 0.2m を測る。溝 E は住居側壁上端から約 0.6m～1.4m に位置する。溝 C～E は位置関係から、竪穴住居 2～4 と関連性が高いと思われる。溝 C～E と竪穴住居 2～4 との位置関係、溝 C～E の切り合い関係から、溝 C を竪穴住居 2、溝 D を竪穴住居 3、溝 E を竪穴住居 4 の周溝と想定した。溝 E 埋土中から、甕(44)、壺(45)が出土している。

住居の埋土は黒褐色粘質土(③層)であり、比較的南東側に厚く堆積する。③層を被覆する②層は VII 層である。床面直上からは、甕(38・39)、鼓形器台(40・41)、高杯(42)、低脚杯(43)が出土した。これらは、住居廃絶時に廃棄されたものと思われる。なお、甕(38)は溝 A 埋没後の南東側壁際中央の床面直上から出土した。このことから、溝 A は本住居の段階では機能していなかった可能性がある。

床面直上より出土した遺物から、古墳時代前期前葉に廃絶した遺構と思われる。(森本)

溝 1 (図 25、図版 14 - 3)

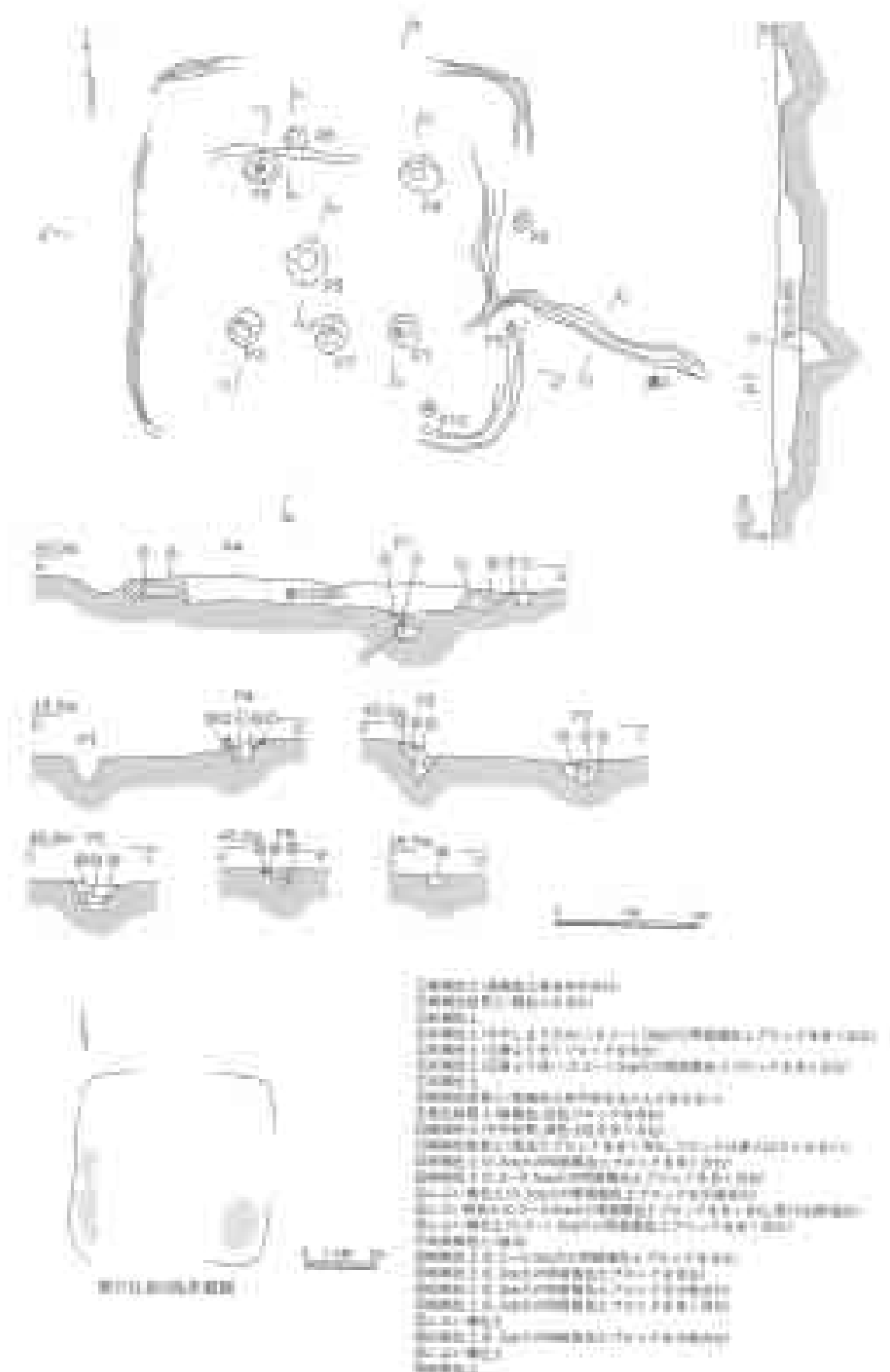


図28 竪穴住居5

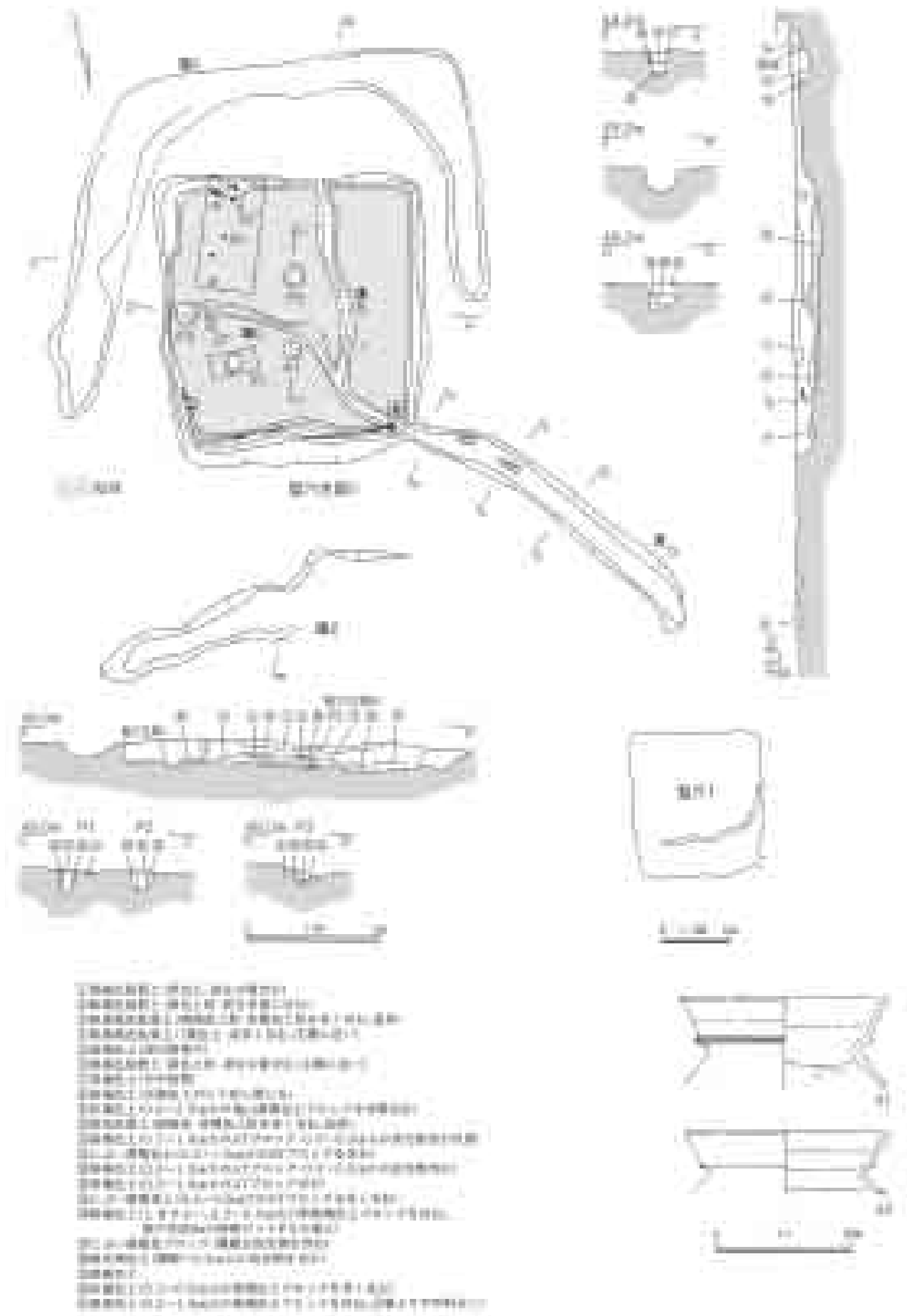


图 29 竪穴住居 6、竪穴 1 出土遺物

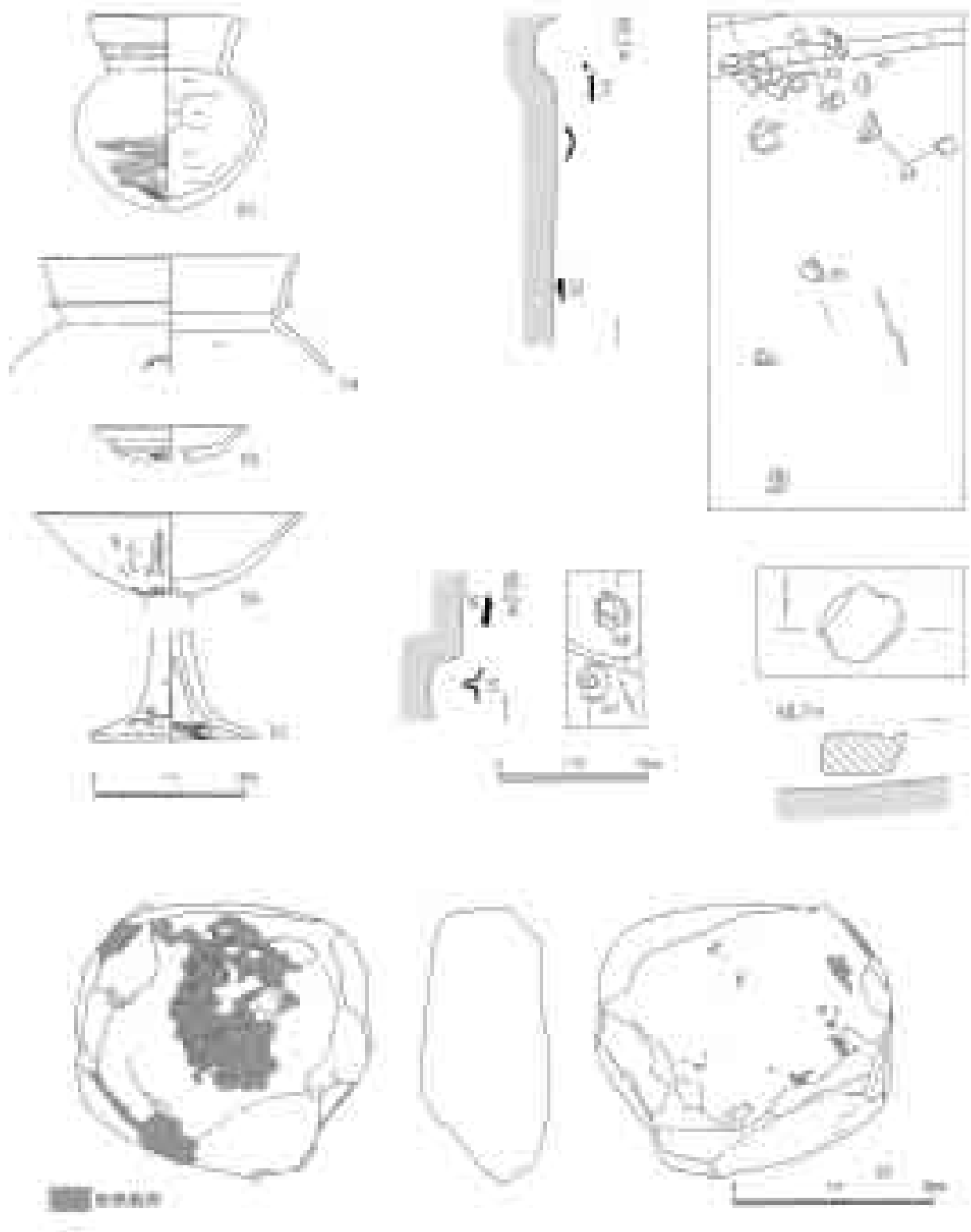


図 30 竪穴住居 6 遺物出土状況および遺物

C区北東側、丘陵上斜面肩部に位置する。竪穴住居 4 南西側に検出した。北西－南東方向に主軸をとり、竪穴住居 4 とは異なる。検出面での幅は約 0.5cm ～南側で約 1.3cm、底面までの深さは概ね約 0.2cm を測る。底面の標高は南端で約 47.38 m、北端で約 47.50 m であり、比高差が約 12cm ある。埋土は黄色粘質土であり、しまりが強い。

なお、本遺構南側 1.1m に黄色粘質土層が堆積する範囲を検出した。南側延長上にあたることから、

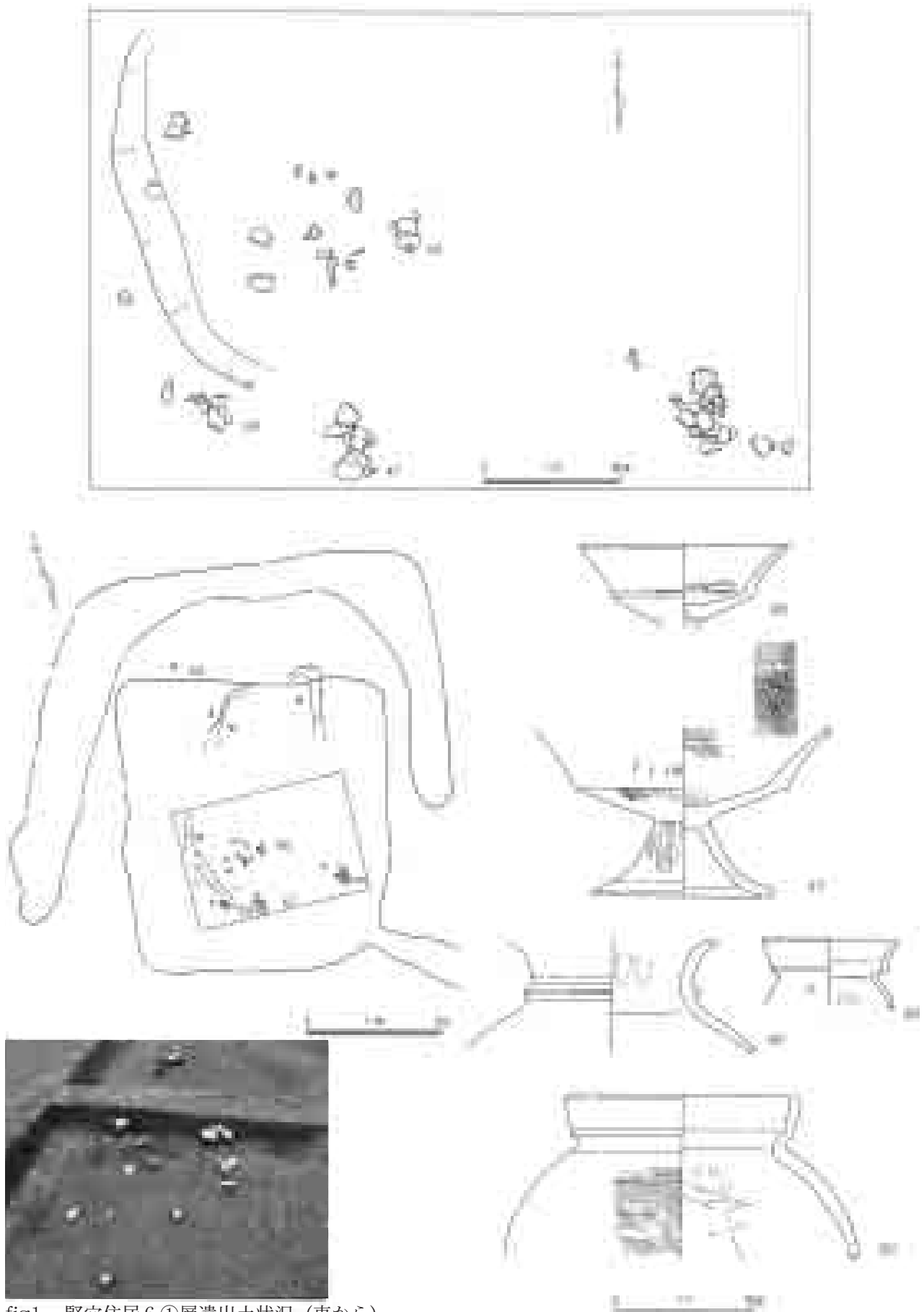


fig1. 竪穴住居6①層遺出土状況（東から）

図31 竪穴住居6①層遺物出土状況および遺物



同一遺構と判断した。この下部に掘り込みは検出していない。 (森本)

#### 竪穴住居 5 (図 28、図版 18)

A区南側、丘陵上平坦面縁辺部に位置する。住居中央部は竪穴住居6に切られ、床面は消失している。並行する2本の周壁溝を検出したことから、住居が2時期にわたって使用されたと考えられる。古段階の住居を5 a、最終段階の住居を5 bとする。

5 aの平面形は隅丸方形を呈すと思われる。周壁溝は住居南側と西側の2辺のみに検出し、幅約0.1m、深さ0.1mを測る。支柱穴と考えられるのはP 1～4である。P 1～2間の中央部にP 7を検出した。P 7は桁や梁の支柱と思われる。住居中央部やや東にP 5を検出した。平面円形を呈し、検出面からの深さは0.4mを測る。埋土は暗褐色土を呈し、明黄褐色土ブロックが混入する。西側周壁溝中央部からC・D区谷部に延びる溝Aは、幅約0.3m、深さ約0.2mを測る。埋土は暗褐色土を呈し、周壁溝埋土の色調と類似する。

5 bの平面形は方形を呈す。床面での長軸約5.2m、短軸約5.0m、床面積は24.5㎡を測る。床面に検出した周壁溝は幅約0.3m、深さ約0.3mを測り、全周するものと思われる。支柱穴と考えられるのはP 1～4であり、P 5・7とともに5 aを再使用したものと思われる。溝Aが5 b段階で機能していたかどうかは、攪乱のため判断できなかった。

住居の埋土は暗褐色土(②層)を基調とする。炭化物を含み、部分的に床面上にまとまる。なお、北東隅、北西隅の床面に、最終掘り形と思われる落ち込み部分を検出した。落ち込み部分には貼床(⑧～⑩層)が施される。遺物は僅かに出土したが、小片のため図化できなかった。

本遺構の廃絶時期は、竪穴住居6との切り合いから古墳時代中期を下限とする。 (森本)

#### 竪穴住居 6・溝 2 (図 29～31、カラー図版 3、図版 16～18)

A区南側、丘陵上平坦面縁辺部に位置する。南側は竪穴住居5を切り、北東側は土坑69と掘立柱建物1を切る。床面には貼床が施され、北西側の貼床上面で並行する2条の周壁溝を検出した。並行する周壁溝は切り合いがあり、住居内側の周壁溝が外側を切る。よって、住居が2時期にわたって使用されたと考えられ、古段階の住居を6 a、最終段階を6 bとする。また、貼床下には竪穴1が存在する。

6 aの周壁溝は住居北側と西側の二辺のみに検出し、幅約0.1m、深さ0.04mを測る。支柱穴と考えられるのはP 1・2である。東側の壁直下中央部に検出したP 3は平面円形を呈し、検出面からの深さは0.2mを測る。埋土は3層に分層され、そのうち⑩層は、よくしまった暗褐色土である。P 3東側に検出した溝Eは溝Cに切られることから、6 a段階の溝と想定している。

6 bの平面形は方形を呈す。床面での長軸約4.3m、短軸約3.9m、床面積は11.9㎡を測る。壁の高さは約0.2mである。床面には幅約0.2m、深さ約0.1mの周壁溝が全周する。支柱穴と考えられるのはP 1・2であり、P 3とともに6 aを再使用したものと思われる。床面に南側周壁溝から北方向に延びる溝BとP 3から西方向に延びる溝Cを検出した。溝Bと溝Cは北西側隅部で合流し、C・D谷部に延びる溝Dとなる。北西隅部壁の土層断面を観察した結果、溝Dは部分的に暗渠状の構造をもつことが確認できた。溝B・Cと溝Dの暗渠部埋土は黒褐色土を基調とし、類似する。溝Dの底面には深さ0.05mの窪みを2ヶ所検出した。住居南側には、幅約0.5m～1.0m、深さ約0.3mのコの字状の溝Aを検出した。周溝とみられ、住居壁上端から約0.1m～1.3mの位置にある。住居北側には、幅約0.9m、深さ0.1mの溝2を検出した。主軸は本住居とは異なるが、溝A南側とほぼ並行する。

住居の主な埋土は暗褐色土(②層)である。住居中央部には黒褐色土(①層)が堆積し、古墳時代

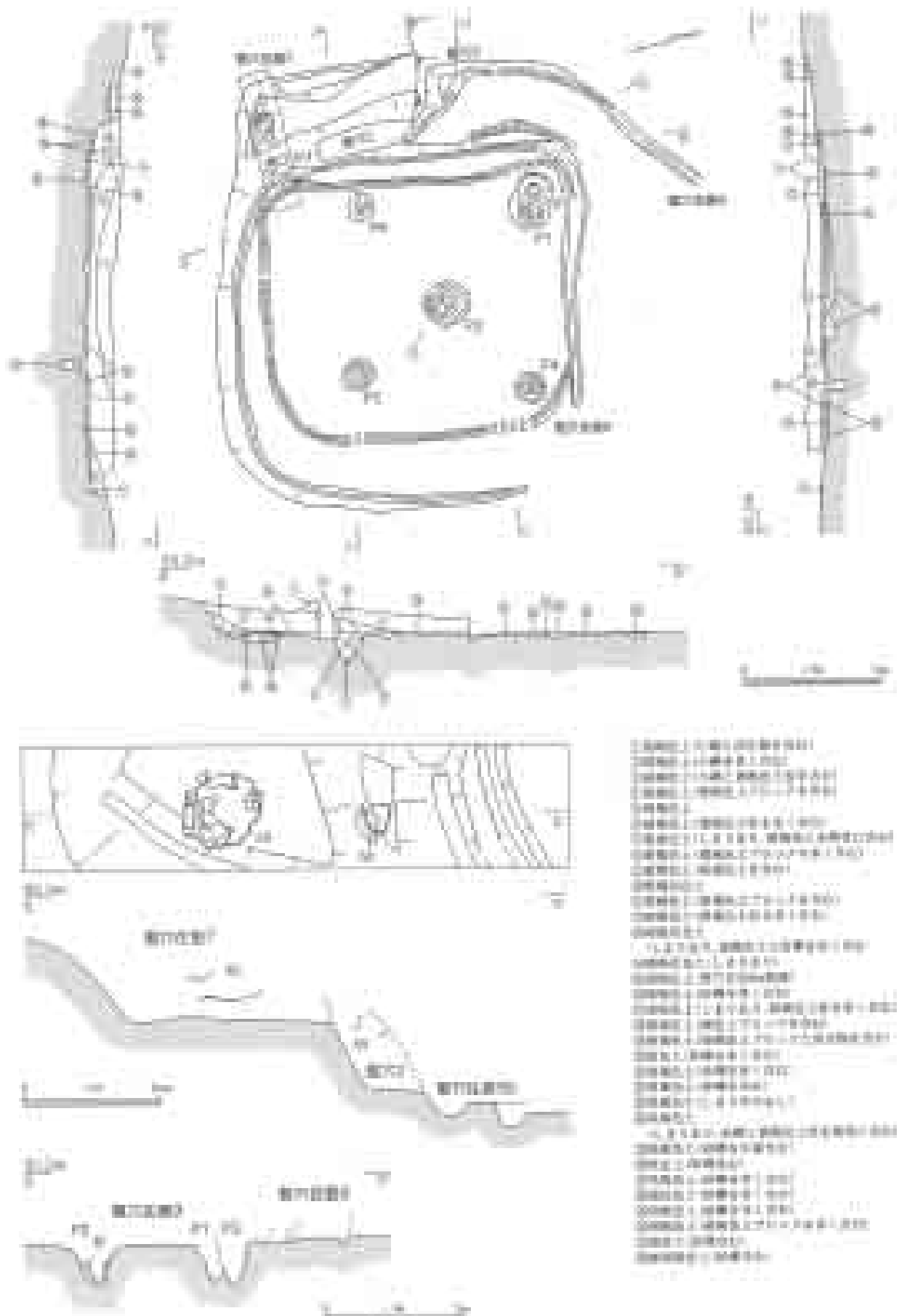


図 32 竖穴住居 7～9、竖穴 2・3

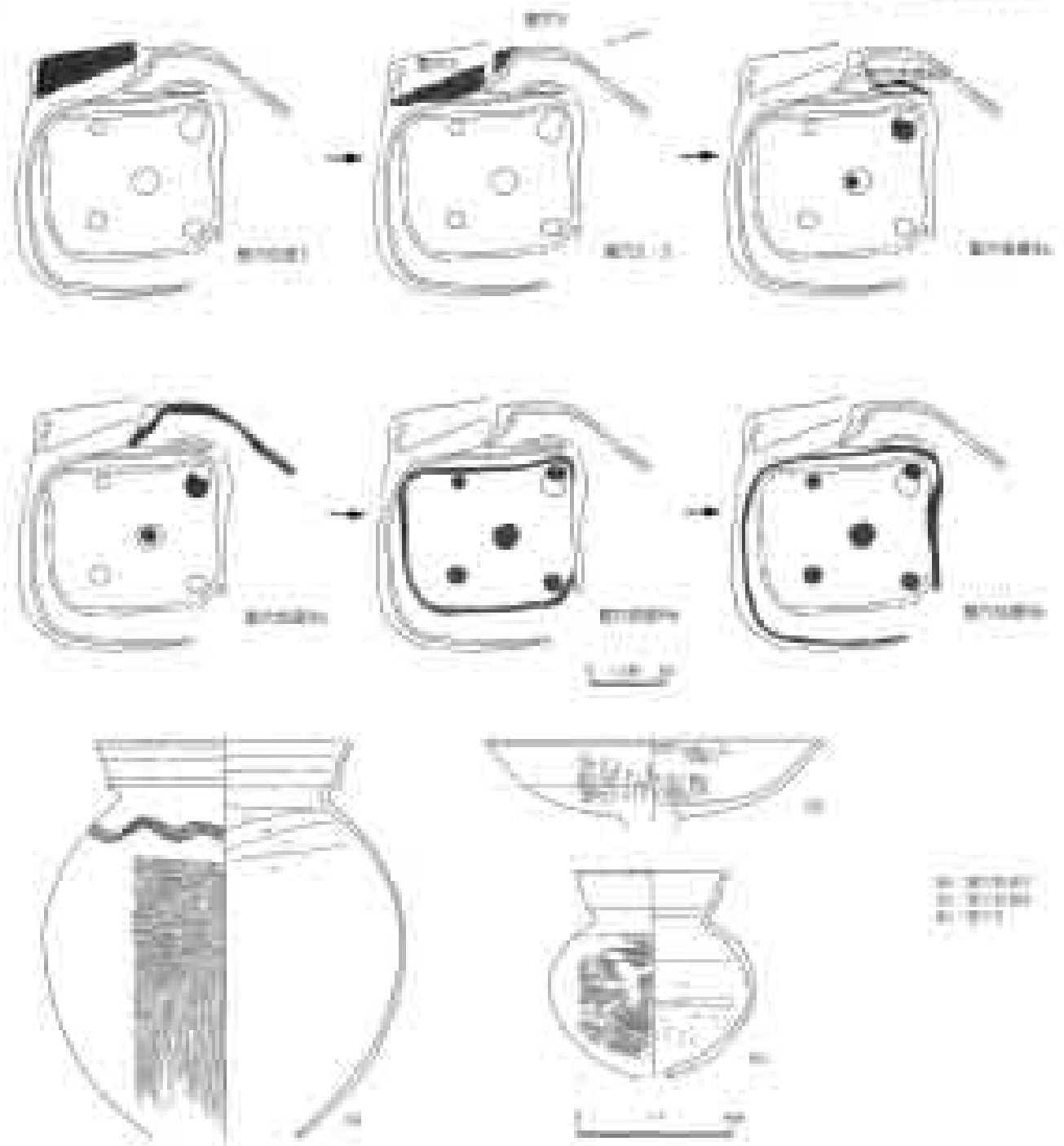


図 33 竪穴住居 7～9、竪穴 2・3 変遷および出土遺物

前期から中期までの遺物（46～50）を包含する。埋没の最終段階にあった窪みに土器を投棄したものであろう。直口壺(53)もやや床面から浮くもので、①層相当と思われる。また床面直上から高杯杯部(56)、高杯脚部(57)、台石状のS5などが出土した。S5は被熱し、鉄分が付着していたことから金床石の可能性がある。床面直上の遺物から、古墳時代中期に廃絶した遺構と思われる。（森本）

#### 竪穴 1（図 29、図版 18）

A区南側、丘陵上平坦面縁辺部に位置する。竪穴住居6の貼床除去後に検出した。北西隅部のみ検出し、平面形は方形もしくは長方形を呈すと思われる。長辺残存約3.3m、壁の高さは約0.04mを測る。床面に柱穴とみられるピットまたは周壁溝などの床面施設は検出していない。

埋土は暗黄褐色粘質土（③層）であり、暗褐色土粒と赤褐色土粒が多く混入する。埋土中から土器

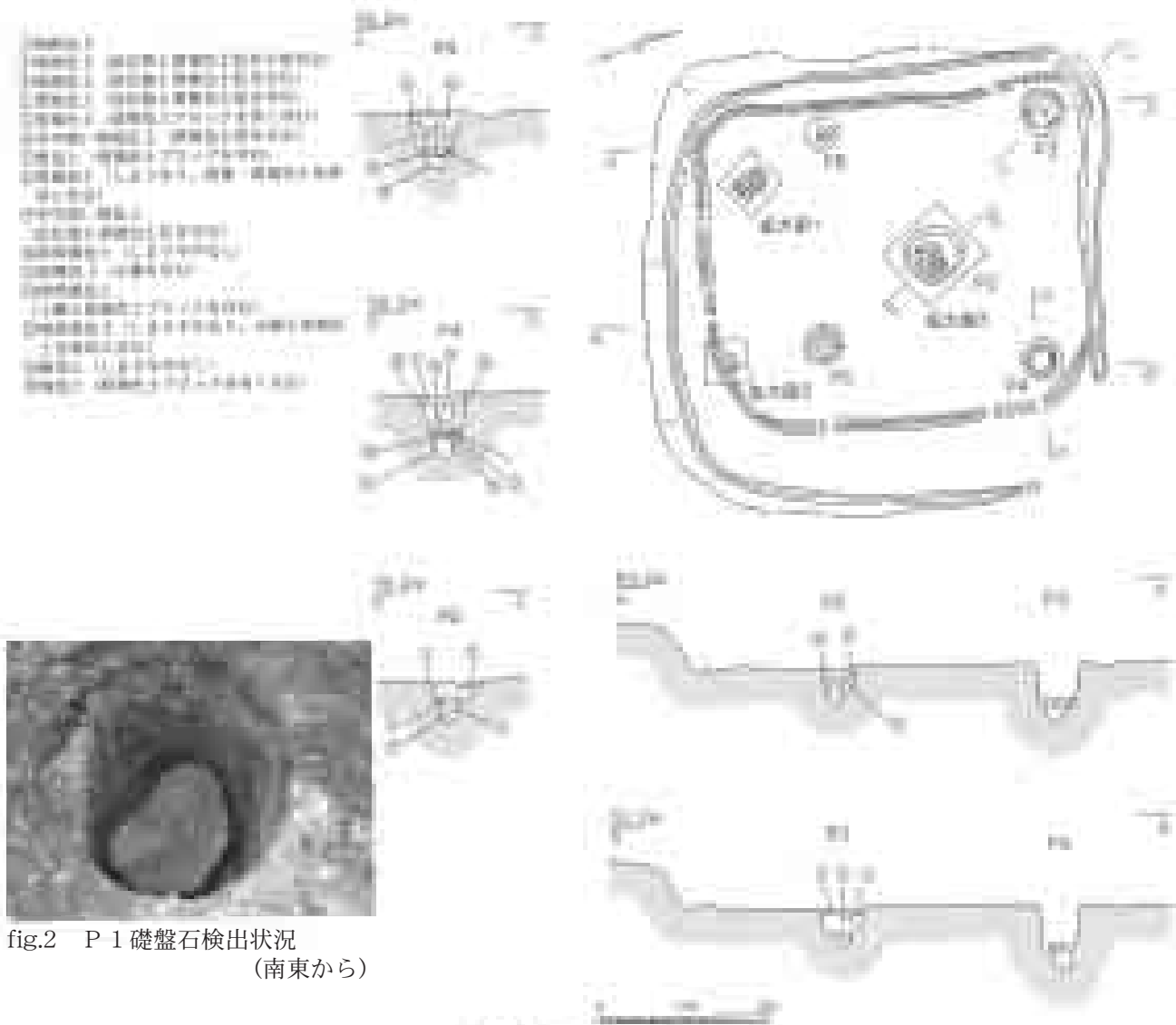


fig.2 P 1 礎盤石検出状況  
(南東から)

図 34 竪穴住居 9 a・b

片が出土したが、図化できない。竪穴住居 6 との切り合いから古墳時代中期を下限とする。(森本)  
**竪穴住居 7～9、竪穴 2・3** (図 32～36、図版 19～22)

F 3・4 グリッド、谷の底部に位置する。竪穴住居 3 棟と、竪穴 2 棟が切りあって検出された。検出面は X 層下面である。北向きの斜面部に位置するため、北側は流失する部分が多く、遺構の残存状況は悪い。切り合い関係は、竪穴住居 7 を竪穴 2 が切り、竪穴 2 は竪穴住居 8・9 に切られる。竪穴 3 を竪穴住居 8 が切り、竪穴住居 8 を竪穴住居 9 が切る。各遺構は後述するように、古墳時代前期前葉から中葉にかけて廃絶したものと考えられ、時期・位置的に近い関係にあるため、ここにまとめて報告する。なお竪穴部上層 (①層) からは、古墳時代後期の遺物が多く出土している (図 46)。

**竪穴住居 7** は、東側を竪穴 2 に切られており、北側は後世の耕作により削平されている。したがって、南西隅部のみの残存である。竪穴部の深さは最深で 0.1 m、床面の標高は 49.5 m を測る。平面形態は不明であるが、南壁と西壁が L 字型を呈することから、方形を呈していたと推定した。南壁際で溝を検出しており、周壁溝の可能性はある。西壁際は、地山削り出しにより、約 5cm 高くなっている。長軸約 3.5 m、短軸 3 m を測る。竪穴部には、暗褐～黒色を呈する土が堆積していた。竪穴 2・竪穴住居 9 に切られる P7 は、竪穴部下層 (②層) と同色の土が堆積しており、本遺構に伴うピットの可

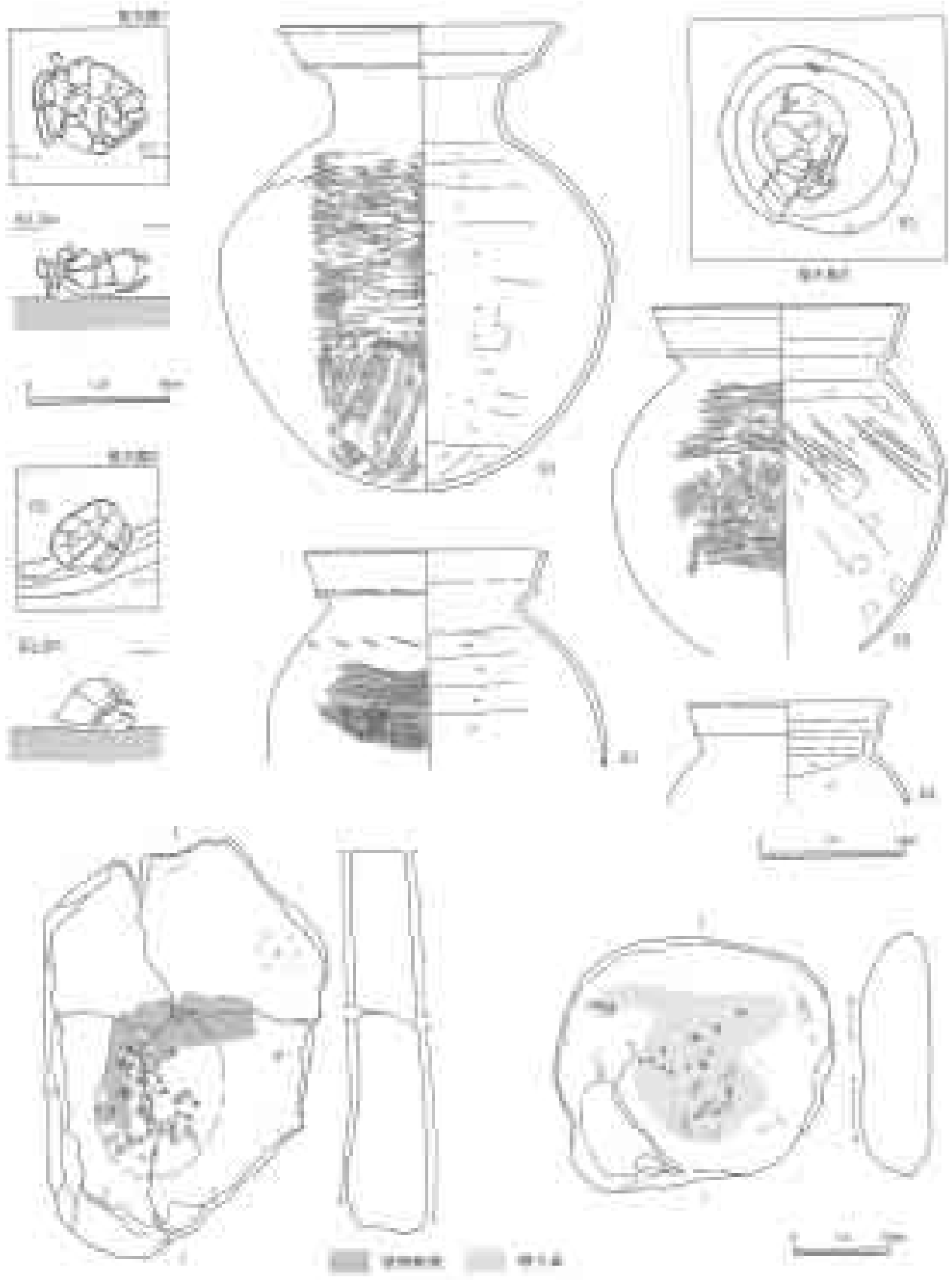


図 35 竪穴住居 9 出土遺物 (1)

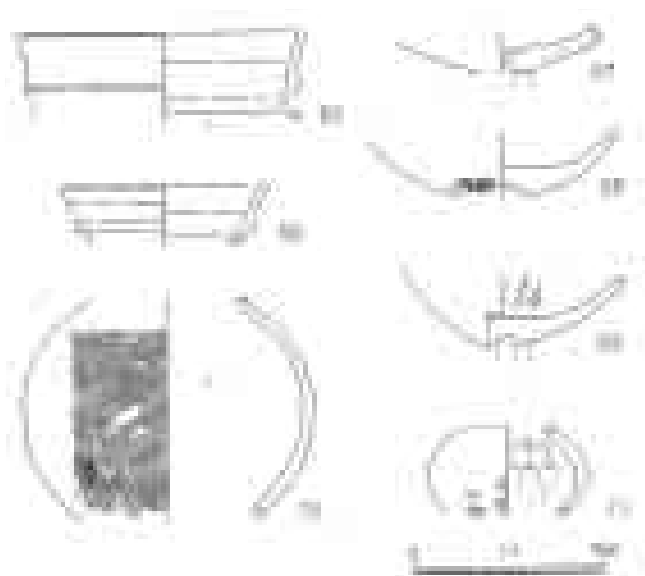


図 36 竪穴住居 9 出土遺物 (2)

拡張されたと判断し、拡張前を竪穴住居 8 a、拡張後を 8 b と呼称する。また、竪穴住居 9 に切られる P 1・2 は、周壁溝と軸が一致する位置関係から、本住居の主柱穴と判断した。遺存状態が悪く、a・b で主柱穴を共有しているかは、確認できなかった。8 b の竪穴部からは少量の遺物が出土しており、59 は古墳時代前期前葉の低脚杯である。出土遺物と切り合い関係から、古墳時代前期前葉に廃棄された竪穴住居と考える。

**竪穴住居 9** は、北東部が流失しているものの、遺存状況は良好である。平面形態は隅丸方形を呈す。床面には、部分的に 2 枚の貼床が施されており、上層の貼床上面で周壁溝 1 条と P 2～6 を検出した。P 3・4 からは、礎盤石の下で柱痕跡を確認でき、同じ位置で柱が建て替えられたものと判断した。また、上層の貼床を除去後、内側にもう 1 条の周壁溝を検出した。このことから、拡張されたと判断し、拡張前を竪穴住居 9 a、拡張後を 9 b と呼称する。

**竪穴住居 9 a** は、長軸約 4.6 m、短軸 3.9 m、深さは最深で 0.5 m を測る。床面の北半には、貼床 (⑩層) が施されていた。床面積は 20.7㎡、床面の標高は約 49.2 m を測る。遺物は出土していない。P 3・4 に建て替えが認められることから、これらの下層部分が、主柱穴に相当すると判断し、P 5・6 も建て替えの痕跡は確認できなかったが、P 3・4 と対をなすことから、主柱穴と判断した。いわゆる中央ピットにあたる P 2 も、検出は 9 b 床面上であるが、主柱穴が 9 a・b 間で共有されていることから、P 2 も共有されていた可能性がある。遺物は出土していない。

**竪穴住居 9 b** は、長軸 5.0 m、短軸 5.2 m、検出面から床面までの深さは最深で 0.55 m を測る。床面には、竪穴住居 9 a 部分を中心に貼床が施されている。床面積は 27.1㎡ を測る。P 3・4 からは礎盤石が出土している。P 3 の礎盤石 (S 6) は柱痕跡を中心に放射状に割れ、中心部がやや沈み込んでいた。P 2 は中央ピットで、径約 0.65 m、深さは約 0.5 m を測る。上層 (①・②層) から、古墳時代前期中葉の甕 (62) がほぼ 1 個体横位で出土した。床面直上からも、古墳時代前期中葉に属する多くの遺物が出土している。61 は壺、63 は甕で、横位で出土した。床面直上出土遺物から、古墳時代前期中葉に廃絶した竪穴住居と判断した。

**竪穴 2** は、竪穴住居 9 に東側を、竪穴住居 8 に北側を切られ、正確な規模・形態は不明である。床面は平らで、壁も直線的に立ち上がることから、竪穴とする。検出面から床面までの深さは、最深で

可能性がある。遺物は、竪穴部から少量出土している。58 は古墳時代前期前葉の甕である。ほぼ 1 個体が、床面から 5 cm ほど浮いた状態で、倒位で出土した。出土遺物と形状、切り合い関係から、古墳時代前期前葉に廃棄された竪穴住居と判断した。

**竪穴住居 8** は、東側を竪穴 2 に切られ、北側が流失しているため、遺存状況は悪い。しかし、残存する周壁溝とピットから、隅丸方形の平面形態を推定できる。深さは最深で 0.2 m、床面の標高は 49.5 m を測る。床面からは、周壁溝 2 条を検出した。周壁溝は 2 重になっており、建て替えが想定できる。土層断面から

0.5 m、床面の標高は約 49.3 mを測る。上部から古墳時代前期中葉の直口壺 (60) が出土している。

**竪穴3**は、竪穴住居8に大半を切られ、南西隅のみ残存している。隅部がL字状を呈することから、平面形態は方形と推定する。床面は平らで壁も直線的に立ち上がるため、竪穴として報告する。検出面から床面までの深さは、最深で 0.1 m、床面の標高は約 49.35 mを測る。遺物は出土していない。(湯川)

#### 掘立柱建物1 (図37、図版18)

A区南側、丘陵上平坦面縁辺部に位置する。梁行1間(約2.5m)×桁行2間(約3.3m)の建物跡である。南側は竪穴住居6と土坑69に切られ、P3西側は竪穴住居6の貼床除去後に、東側は土坑69の底面で検出した。主軸はN-28°-E、梁桁に囲まれる面積は約7.7㎡である。柱間距離は梁行方向が2.50m～2.52m、桁行方向が3.27m～3.34mである。P1～3・5の土層断面では、径0.1m～0.2m前後の柱痕が観察される。柱痕の周囲の埋土は暗褐色土を基調とし、明黄褐色土ブロックが多く混入する。遺物は出土していない。竪穴住居6との切り合いから古墳時代中期を下限とする。(森本)

#### 土坑28 (図38、図版23-3・4)

D3グリッドに位置し、中世の土坑42に切られる。長径2.2m、短径1.5mほどの楕円形を呈し、深さは約0.5mを測る。埋土は厚さ0.1mほどの土が互層状に堆積する。土坑内から高杯(72)、および小型壺(73)が出土した。(中森)

#### 土坑29 (図38、図版23-1・2)

竪穴住居6の南東部に位置し、住居南側を囲う周溝(溝A)に切られる。土坑中位が大きく張り出し断面形は算盤玉形を呈す。上面は径0.6mほどの円形で、深さは0.7mを測る。また、底面近くから板状の炭化材が出土し、分析によってこれらはクリと同定された(第10章6)。遺構内にはV層相当の黒灰色土が厚く堆積し、これには炭を若干含む。貯蔵穴であろうか。(中森)

#### 土坑30 (図38)

竪穴住居2の南壁際、貼床下から検出した。南側は削平され、また東半分もトレンチにより切られる。長径は残存長で1m、短径1.15mほどを測り、楕円形を呈したものであったと推測される。深さは約0.15mで、暗灰色粘質土の単層である。(中森)

#### 土坑33 (図39)

集石1の3mほど南に位置する。長径1.0m、短径0.7mほどの隅丸長方形を呈し、深さは谷側で約0.5mを測る。底面には人頭大の礫があった。V層下面検出のため、当期と判断した。(中森)

#### 焼土1 (図38)

H4グリッド、谷のもっとも低い部分に位置する。東西を軸とし、長径0.9m、短径0.45mほどの楕円形を呈す。深さは約0.1mで、中央部に径0.1mほどのピットがみられる。遺構内には焼土と思われる橙褐色土が堆積するが、壁面に焼けた痕跡はなく、また炭もみられない。(中森)

#### 焼土2～4 (図38)

集石1の3m南西に位置し、南北に0.7mほどの間隔をもって点在する。北から焼土2、3、4とし、焼土2は径0.6mほど、焼土3は0.5～0.7mの不定型な広がり、焼土4は径0.15mほどの小ピット状であった。いずれも深さは0.1mに満たない。VI層上面で検出。集石1の礫が焼けていることと関連するものか。(中森)

#### C・D区の遺構群 (図版23-5)

谷部XI層上面で検出した遺構群である。谷上部I・J-9・10グリッドと、谷中部G7・8グリッ

ドに集中し、またピットについてもほぼ同様の傾向にある。いずれも谷の低い部分にあり、地形に並行し帯状に分布する。遺構内から遺物は出土しておらず、埋土および検出面から当期と判断した。

土坑 31 (図 39)

I 10 グリッドに位置し、長径 0.7 m、短径 0.6 m ほどの不定円形を呈す。深さは約 0.2 m で、埋土は X 層相当の単層である。 (中森)

土坑 32 (図 39)

I 9 グリッドにあり、西側はトレンチで切られる。長径は残存長で 0.65 m、短径は 0.55 m ほどを測る楕円形状を呈すものである。深さは約 0.45 m を測る。 (中森)

土坑 34 (図 39)

F 8 グリッドにあり、長径 1.2 m、短径 0.8 m ほどの不定形である。深さは約 0.25 m を測る。 (中森)

土坑 35 (図 39、図版 23 - 6)

I 9 グリッド、土坑 32 の約 4 m 北東に位置する。南半分はトレンチにより切られる。長径 1.75 m ほどの楕円形を呈すものであろう。土坑東端上面に人頭大の礫が出土した。 (中森)

土坑 36 (図 39)

G 7 グリッド、土坑 37 の 4 m 南東に位置する。北半分はトレンチで切られる。長径 1.4 m ほどの長楕円形を呈すものと思われ、東側は浅く土坑状に窪む。 (中森)

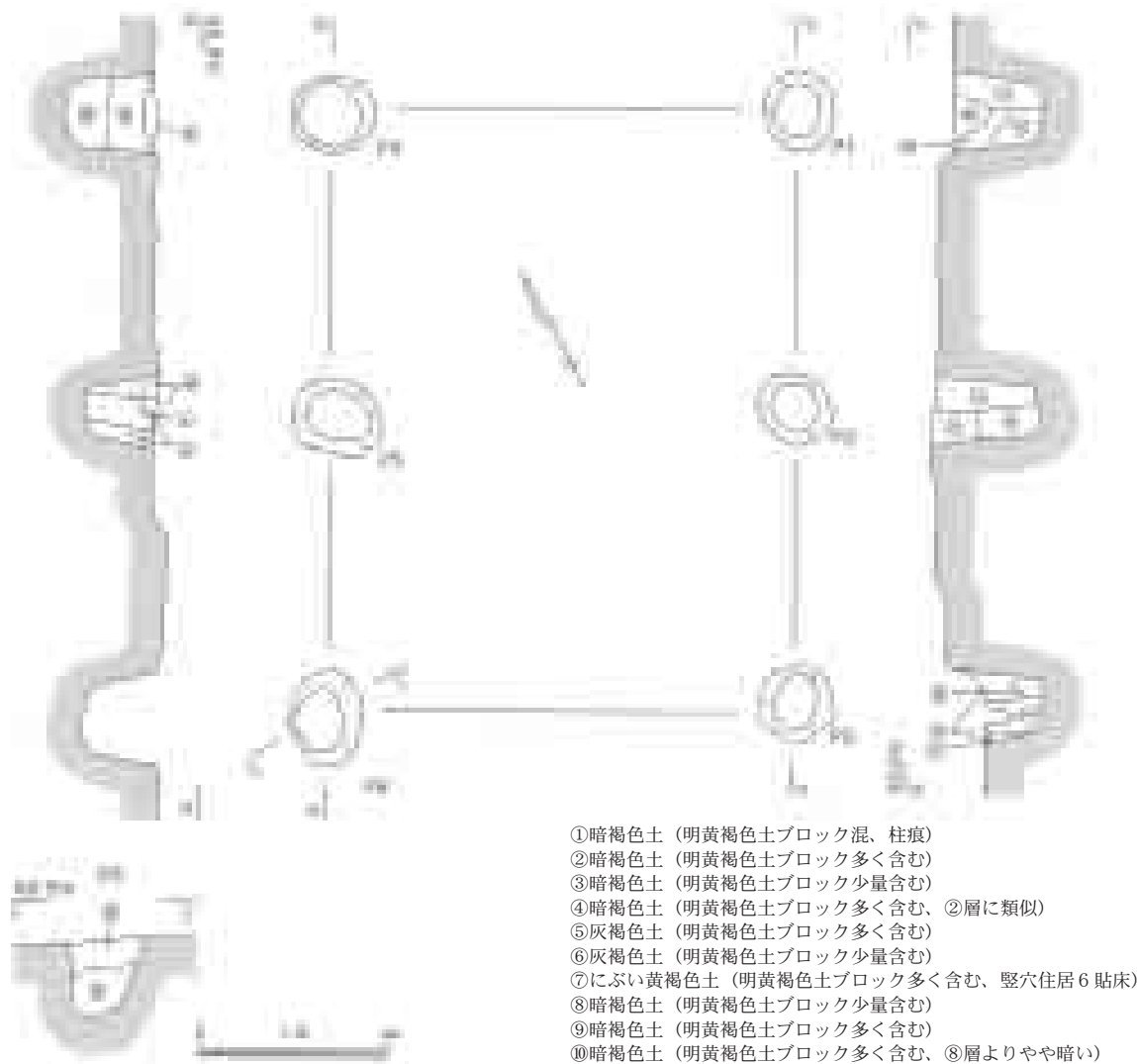


図 37 掘立柱建物 1